



Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要 一般教育 (2007.03) 第23号:53～69.

日本近現代「学校小説」100選—教養としての「教育人間学」の構想—

藤尾 均

日本近現代「学校小説」100選 ——教養としての「教育人間学」の構想——

A Catalog of Japanese Modern Novels which deal with School Education: A Preparatory Step to set up an Ideal Textbook of Educational Humanities

藤 尾 均
Hitoshi Fujio

Abstract

In this paper, the present writer, who is engaged in the research in cultural studies, has introduced one hundred Japanese modern novels which deal with school education to such college and university students as have not found their own rosy prospects for the future yet. For the present writer, this work must be a preparatory step to set up an ideal textbook of educational humanities.

キーワード：大学生 学校 小説 教養 教育人間学

college and university students, school, novel, cultural studies, educational humanities

はじめに 本稿のねらい

大学におけるいわゆる「教養」課程の意義は、学生が文字通り「幅広く深い教養」（大学設置基準）を培うことにあるとされている。しかし、もはや今日では、これはカビ臭い建前論である。大学生が同世代の若者の中の選りすぐられたエリートであった時代ならともかく、マスの時代を経てユニバーサルとなりつつある現在では全く通用しない。1990年代以降、リベラルアーツを重視する「教養」部や「教養」課程は多くの大学で廃止・縮小に向かってきた。多くの大学生が、本音の部分では、「教養」課程など無いほうがよいと思っている。敢えてこの課程に意義を見出すとしても、せいぜい、専門課程に進むに先立ち受験勉強の垢を落としておくためのモラトリアム期間という程度に過ぎない。

とはいえ、こう捉えてしまえば身も蓋もない。敢えてこの時期にもっと積極的な意義づけを与えるならば、受身の勉強から主体的な自学自習への転換を図るべき時期であるといえよう。しかし、これも理想に過ぎるスローガンである。筆者としてはもっと控えめに、いわゆる「教養」課程は、自分

の生育歴や能動的学習歴・受動的被教育歴を振り返って将来展望を掴み取る時期あるいは軌道修正を図る時期と捉えたい。評論家浅羽通明の『教養論ノート』（幻冬社2000年）の表現を借りるなら、真の「教養」とは、「どこまでも、自分の生き方へフィードバックしてゆける知、生きる指針を、自分とは何かを、世の中全体との関係で位置づけられる知」である。そして、その知を学生自らが見出すきっかけを提供することこそが、いわゆる「教養」教育担当教員、とりわけ人文系の当該教員の重要な役割のひとつであろう。

「教養」の中身といえば、人文系では古くから、人生の意義を深く思索するための「哲学」が真っ先に挙げられてきたが、先人の人生観や世界観をなぞるだけの哲学史はもはや陳腐であるし、そもそも抽象論や観念論、理屈の類は現代の学生からは嫌われがちである。では「教養」としての「歴史（史学）」はどうか。これを学ぶ意義は、理想的には「温故知新」にある。しかし、いまどきの多くの学生には所詮、自分には何の関係も無い過去の遺物をこねくり回しているとしか映らないであろう。もっと具体的・実践的な「教養」、学生がすんなりと入っていきやすい「教養」、それこそが「文学」であろう。

なかでも、学生だけでなく「教養」教育担当教員にとっても共通の土俵となる最も身近な文学ジャンルが、主たる教育現場である学校を舞台とした小説、教員や児童・生徒・学生が登場する小説、いわゆる「学校小説」である。長い受験勉強のトンネルをようやく抜け出し、大学に入ったばかりの学生には、ちょっと立ち止まり、今までの小学校・中学校そして高等学校・予備校、あるいは入学したばかりの大学をも含めた学校生活のあゆみを振り返って、それを総括してみることが必要不可欠であろう。そうしてこそ、悔いのない大学生活を展望することも可能となろう。俗にいう「自分探し」である。この時期なら進路変更もまだ間に合う。こうした総括への有力な手引きとなるのが「学校小説」にほかならない。

「学校小説」を少し齧るだけで、学生は、読者である自分と同じような悩みを抱える登場人物がウヨウヨしていることに気づくであろう。そうした登場人物に感情移入することによって、自分ひとりの悩みだなどと思い煩っていたことが、じつは過去の多くの若者たちも通過してきた悩みであったのだと気づければ、自分は何も特別な人間ではなく「タダの人」なのだと悟ることもでき、かえって気が楽になるであろう。あるいは逆に、こんな素晴らしい生き方もあったのか、と小説を読んで一挙に視野が広がる場合もあるかもしれない。いずれにせよ、「学校小説」を齧ることは一種のショック療法になる。あとの思索を深めるのは学生自身の課題である。

本稿の端的なねらいは、「教養」課程の学生の将来展望の一助として「学校小説」のカタログを提示することにある。むろん、カタログ本は既に巷に氾濫している。既にある立派なカタログに屋上屋を架すことになるだけかもしれない。それにそもそも、カタログを提供することが良いことかどうか疑問もなしとしない。かえって学生を情報の大洋で溺れさせたり、学生が自分自身で文献を探そうとする意欲を削いだりする危険もあるからである。学生の自学自習の手引きとなるならよいが、彼らを過保護にするならむしろ弊害のほうが大きい。しかし、それでもなお筆者は、日本ではあまり明確に意識されたことのない「教養学」、すなわち「教養」それ自体の中身やあり方を問う学問の確立へ向けてのいわば一里塚とすべく、本稿を執筆する。

差し当たっては、外国文学よりは取り付きやすい日本文学、それも近現代文学に注目すべきであろう。とはいえ、日本の近現代に限定しても当該作品は綺羅星のごとく存在するので、まずは数を限定して100選としたい。むろん、これは厳密に100の作品という意味ではない。あくまでも概数である。

1. 「学校小説」100選 その選定方針

なぜ「学校小説」に限定するのか。ドイツ語のビルドゥングス・ロマンの訳語として古くから言い習わされているのが「教養小説」である。青少年が大人になるまでの成長過程を描いた小説である。これは「青春小説」という概念ともかなり重なる。しかし、これらのカテゴリーで選定するとコンセプトが曖昧になり過ぎ、カタログの体裁をなさなくなるおそれがある。多くの教育関係者が指摘するように、そもそも欧米と異なり日本では、青少年が自立ないしは自律した大人になるプロセスにおいて学校という場が占めるウエイトはきわめて大きい。日本の若者は、良かれ悪しかれ学校という制度・システムに縛られてきた。いじめや非行や自殺の問題も、その多くが学校への不適応ないしは学校教育のつまらなさに起因すると指摘されている。だからこそ、学校を舞台にしている、あるいは学校教育に素材を求めている「学校小説」に限定し、それにこだわりたいのである。ちなみに「学園小説」という言葉もあるが、「学園」というとなにやら楽しげな印象をむやみに与えるように思われるので避けたい。

もっとも、誰もが一度は経験している「学校」現場といっても、小学校・中学校・高等学校・専門学校・予備校・大学などじつにさまざまである。したがって「学校小説」の内容もさまざまである。本稿ではそれらを極力わかりやすくテーマ別に分類して提示するつもりであるが、分類のオーバーラップは避けられそうもない。あるいは逆に、かなり恣意的な分類と批判されるかもしれない。

ともあれ、以下、明治・大正・昭和のさまざまな時期に発表された小説を、大テーマごとに順不同に紹介しよう。平成の作品のほうが学生にとってはいつそう共鳴できる要素が強いかもしれないが、現時点では評価の定まっていない作品も少なくないし、学生自身に近すぎて、かえって自分を客観視する妨げとなるかもしれないとも思われるので割愛する。また、大学生向けのカatalogであるから、いわゆる児童文学（児童のための文学）も除外したい。

なお、以下に紹介する小説群は、いずれも現物が筆者の手許にあり、筆者が読了したものばかりである。所有しているのがどの版か（たとえば岩波文庫版か新潮文庫版か角川文庫版か、中央公論社「日本の文学」（全80巻）版か、筑摩書房「筑摩現代文学大系」（全97巻＋別巻5）版か、同「現代日本文学全集」（全97巻＋別巻3）版か、あるいは新潮社「新潮現代文学」（全80巻）版か、はたまた単行本か、など）は、煩瑣にこそなれ、ここではあまり意味をなさないので割愛する。また、作品名の直後の括弧内に示す年号は、原則としてその作品が最初に発表された年である。

なお、作品群の整理にあたっては、『日本近代文学大事典』（講談社1984年）、『日本現代文学大事典』（明治書院1994年）、『新版ポケット日本名作事典』（平凡社2000年）、『現代文学鑑賞辞典』（東京堂出版2002年）、『社会文学事典』（冬至書房2007年）などを参照したが、整理のアンクルおよび内容紹介は決してそれら事典・辞典類からの剽窃ではなく、あくまでも筆者自身のものであることをここに明記しておく。

2. 6つの時代区分

明治から大正を経て昭和の末年に至る120余年の日本史を論じる場合、政治・経済・軍事・外交史などをも考慮に入れつつ教育史・教育制度史を念頭に置くなら、大まかな時期区分としては、次のようにほぼ20年間ずつ6つに分けるのが妥当であろう。

まず、明治維新から自由民権運動を経て「大日本帝国憲法」が發布されるまでの時期である。これは教育史的には、1871（明治4）年の「学制」發布によって国民皆学が目標に掲げられ、その後、初等・中等・高等教育にわたって同時並行的にあり方が模索され、それが「教育令」を経て「学校令」

に結実し、一応の制度的規定が整った時期である。この間、4年制の義務教育制度がスタートしたが就学率は伸び悩んだ。これを「第1期」と呼ぼう。

次は、明治期後半の、日清・日露戦争を経て明治末年に至る日本資本主義確立期、換言すれば国威発揚期である。教育史的には、この時期に義務教育の修業年限は6年になり、就学率もほぼ100パーセントを達成した。中等教育も急速に拡充されたが、高等教育となると、「帝国大学令」にみるように、まだ大学は官立の帝国大学のみであり、大学生はエリート中のエリートであった。これを「第2期」と呼ぼう。

次の「第3期」は、憲政擁護運動で幕を開けた大正期である。第一次世界大戦・ロシア革命を背景として労働運動・大衆運動が高揚した時期、政治的にはいわゆる大正デモクラシーの時期である。この雰囲気は昭和初期の満州事変直前まで続いたとみることができるので、本稿ではそこまでを当該期に含める。教育史的には初等・中等教育が大きく充実し、高等教育も拡充期にあたっていた。私立の高等教育機関が整備され、官立の専門学校とともにその多くが大学に昇格した。

次の「第4期」は、日本が日中戦争から太平洋戦争へと突き進み大空襲や原爆投下を経て破局を迎えた時期である。教育の面では、戦争遂行のために徹底的な思想統制が図られた。学徒出陣により少なからぬ若者が犠牲となり、また多くの学童が集団疎開を余儀なくされた。なお、この時期の末に義務教育年限は8年となった。

次の「第5期」は、いわゆる戦後民主主義の確立期である。平和と民主主義を基本理念とした「日本国憲法」および「教育基本法」が制定され、義務教育年限は前期中等教育までの9年間に延長された。後期中等教育（高校教育）も拡充が図られ、高校進学率が急速に上昇した。自由と民主主義を基盤に大学生の政治的運動・政治活動がタブーではなくなり、むしろ彼らのステータス・シンボルとなった。そして彼らの一部は社会主義革命・共産主義革命をさえ志向していた。この種の学生運動は1960年代後半の大学紛争でクライマックスを迎える。この時期の後半ともなると、高等教育も急速に拡充されていき、1963（昭和38）年には大学・短大進学率は15パーセントを超え、大学生はエリートからマスになった。

この「第5期」の終焉を厳密にいつとみたらよいか、諸説あろう。一連の大学紛争は1969（昭和44）年1月の東大におけるいわゆる安田講堂陥落をもって一応終わったとされているが、その後もしばらくは余震がつづいたし、若者たちの革命幻想は1972（昭和47）年3月に発覚した連合赤軍リンチ殺人事件を経て初めて徹底的に打ち砕かれたともされるので、同年までは「第5期」という見方もできよう。しかし、既に1969年には学校現場からは「革命ごっこ」はほぼ姿を消していたので、本稿ではこの年を「第5期」の終焉とみることにする。

最後の「第6期」は、高度経済成長真っ只中の1970年代を経て昭和の終焉に至る約20年間である。高校進学率は90パーセント以上を達成した。大学生はもはやエリートどころかマスですらなくなりつつあり、ユニバーサルに限りなく近づいていった。それと歩調を合わせて若者の政治的無関心も急速に増幅していった。

以上を整理しよう。第1期は、1872（明治5）年の「学制」公布から1889（明治22）年の「大日本帝国憲法」発布に至るまでの時期、第2期は、日清・日露戦争を経て明治の末年（1912年）までの時期である。第3期は、憲政擁護運動に始まるいわゆる大正デモクラシーの時期で、終焉は1931（昭和6）年の満州事変の直前である。第4期は満州事変から日中全面戦争を経て1945（昭和20）年の太平洋戦争の敗北に至るまでである。第5期は戦後民主主義の高揚期で、その終焉は大学紛争が一応の終焉を迎えた1969（昭和44）年である。そして第6期は、高度成長真っ只中の1970年代を経て昭和の

終焉までである。

3. 大学生像の6つのパラダイム

この約120年の間に、質的にも量的にも時代とともに最も大きく変容したのは、初等・中等教育よりも高等教育であろう。そこで、まず手始めに、前述の各時期の典型的な大学生像を描いた6つの作品を取り上げ、6つのパラダイムとして提示してみよう。

第1期の典型は坪内逍遙(1859～1935)の『当世書生気質』(1885年)である。これは近代小説の嚆矢とされ、当時唯一の大学(東京大学)あるいは東京を中心に陸続と誕生していた私立専門学校の学生が主人公である。時あたかも、自由民権運動が盛り上がりを見せる中で中央集権国家体制の揺籃期であった、この明治10年代は近代教育制度の揺籃期にもあたるが、高等教育はまだ制度的には明確な像を結んでいない。しかしながら、学生の不勉強ぶりや放蕩ぶりは既にこの時期からの伝統であったことが本作品からうかがえる。

第2期の典型は夏目漱石(1867～1916)の『三四郎』(1908年)である。日露戦争直後の国力高揚期あるいは充実期に日本の国運を担うべく運命づけられた東京帝国大学の学生、その理想と現実とが一人の学生三四郎に象徴されて描かれている。エリート中のエリートのみが通えた帝大であったが、大学の授業のつまらなさや退屈さに対する嘆きは、当時も今もさほど変化はないようである。恋愛にせよ友情にせよ全編を覆うのどかな雰囲気は、当時のエリートのみが味わえる特権であった。

第3期はいわゆる大正デモクラシー時代で、この時期、とりわけ私立高等教育機関の地位と価値の向上には眼を見張るものがあつた。尾崎士郎(1898～1964)の『人生劇場』は、作者の体験を交え戦後まで書き継がれた、いわば自伝的大衆的大河小説である。このうち「青春編」(1933年)は、第一次大戦中の早稲田大学で起こった学園紛争、いわゆる早稲田騒動の中での、主人公たちの粗野ではあるが健康的な言動の数々を生き生きと描出している。そのしばらく後に「大学令」が公布され、早稲田をはじめ私立の高等教育機関は正式に大学として認められた。

第4期は、こうした自由な雰囲気がほとんど影を潜め、日本全体が戦争一色に彩られる時期で、文学にもそれが色濃く反映している。阿川弘之(1920～)の『雲の墓標』(1955年)には、太平洋戦争末期に海軍予備学生に志願した大学生たちの苦悩が、彼らの遺稿に基づいて描かれている。主人公たちは学業も恋も捨て、運命に身を託して死ぬことだけが自分たちに残された道だと諦念する。

第5期は、平和と民主主義が謳歌されつつも左右のイデオロギー対立も激しかった時代である。この時期が象徴的に描かれている作品は五木寛之(1932～)の自伝的大衆的大河小説『青春の門』の、「筑豊編」につづく第2～4弾「自立編」「放浪編」「墮落編」(1971～1975年)であろう。やはり大学としては早稲田が主な舞台であり、いわば『人生劇場』『青春編』の戦後版である。まだ敗戦の混乱を引きずりながらも講和条約によって日本が一応の独立を勝ち得つつあった1952(昭和27)～55年頃が作品の背景である。主人公たちの政治への積極的なコミットメントは、言論・集会・結社などの自由が新憲法によって保障され始めたこの時代ならではのエネルギーの発露といえよう。こうした特徴は60年安保の闘争を経て大学紛争で頂点を迎える。

その後、学生たちは政治的無関心へと行き着くが、これは高度成長の晩期に始まる第6期のことである。戦後30年を経て大学生はとうの昔にエリートからマスになっていた。そのマスを象徴するような平凡な大学生で、政治には全く関心がなく、そもそも名前からして平凡な山本太郎を主人公としているのが、曾野綾子(1931～)の『太郎物語(大学編)』(原題は『太郎物語・青春編』、1976年)である。これは『太郎物語(高校編)』(原題は『太郎物語』、1973年)の姉妹編にあたり、モデルは作者の

子息であるらしい。舞台も都会のいわゆるエリート大学ではなく、ごく普通の地方大学である。

以上の6作品は、以下の拙稿の叙述において、各時期の空気を象徴する太い軸として機能するであろう。しかし、ここで注意しておくべきことは、上記作品のうち『当世書生気質』はそこに描かれている時期も執筆時期も共に第1期、『三四郎』は共に第2期、『太郎物語（大学編）』は共に第6期であるが、他の3作品は、描かれている時期と執筆時期にずれが生じていることである。『人生劇場』『青春編』は、第4期になってから作者自身の第3期における体験を踏まえて書かれた作品である。これを「第3(4)期」の作品と表現することにしよう。最初の数字3が作品に描かれている時期であり、括弧内の数字4は、作品が実際に執筆された時期ということになる。同様にして『雲の墓標』は「第4(5)期」、『青春の門』『自立編』『放浪編』『墮落編』は「第5(6)期」の作品と表記できる。逆に、これらにならって『当世書生気質』は「第1(1)期」、『三四郎』は「第2(2)期」、『太郎物語（大学編）』は「第6(6)期」と表せば、表記の統一性が保たれる。

しかも、こう表記すれば、括弧の内外の時期がずれている作品、たとえば「第4(5)期」の作品は、作者の執筆環境としての「第5期」というフィルターを通して「第4期」を描いた作品と捉えることができ、作者の記憶あるいは思い出の中で美化された部分などを多分に含む小説であって、時代相を等身大に写し取った作品でない可能性が高いということが注意されよう。以下、作品への言及にあたってはこの表記を用いる。また、描かれている時期や執筆時期が複数にまたがる作品に関しては、たとえば「第1・2(3)期」「第3(4・5)期」などと表記することにする。

時代区分とそれに対応する学生像をみてきたが、いささか単純に図式化し過ぎていると批判されるかもしれない。各時期の内部に踏み込めば、どの時期であれ、該当する「学校小説」のストーリーや人物像はかなり多岐にわたる。以下、具体的にみていこう。

4. 戦争と青春

学校教育の変転が著しくその影響で多くの若者たちが大きく翻弄されたのは、何といっても日中戦争および太平洋戦争の時期、つまり第4期であろう。少年期あるいは青年期がこれらの戦争と重なった人々の中には、勉学や恋愛の機会を奪われたり歪められたりした人々、若くして死んでいった人々、親元を離れて疎開を余儀なくされた人々、生き残っても戦争体験をトラウマとして後々まで引きずっていかざるを得なかった人々などが大勢いた。以下、特徴的な作品を挙げよう。

全国の旧制中学・高等学校に現役将校が配属され軍事教練が正課として行われるようになったのは1925（大正14）年のことであるが、第4(4)期の野上弥生子（1885～1985）の『哀しい少年』（1935年）は、外国の悲惨な戦争映画を見た翌日に軍事教練に耐え切れなくなってエスケープする旧制中学の生徒が主人公である。

前述のように第4(5)期の阿川弘之『雲の墓標』には、太平洋戦争末期に海軍に志願した大学生たちの悲惨な運命が描かれているが、同じ第4(5)期の作品、沖縄出身の石野径一郎（1909～）の『ひめゆりの塔』（1949年）には、1945（昭和20）年の沖縄地上戦に看護要員として駆り出された沖縄県立女子師範学校の生徒たちの悲劇が描かれている。これは何度も映画化・ドラマ化された。

他方、小学生の学童疎開を描いた第4(5)期の作品に、高井有一（1932～）の『少年たちの戦場』（1967年）があり、この分野の秀作と評されている。さらに第6(6)期の阿部牧郎（1933～）の『それぞれの終楽章』（1987年）は、学童疎開から数十年後に再会した旧友に対する主人公の違和感をテーマにしている。

5. 学生・生徒の政治的運動・政治活動

現在では隔世の感があるが、前述の五木寛之『青春の門』『自立編』『放浪編』『墮落編』がよく雰囲気を与えていると思われるのが、第5期における学生・生徒の政治的運動・政治活動である。それらの動きは戦前からあったが、大半は非合法であった。戦前の第3(4)期の作品として有名なのが、前衛政党に指令された大学生の非合法革命運動を描いた広津和郎(1891～1968)の『風雨強かるべし』(1933年)である。また、旧制高校の生徒といえば年齢的には現在の大学教養課程の学生にほぼ相当するが、第4(4)期に属する野上弥生子の『若い息子』(1937年)は、左翼革命運動にのめり込み始める旧制高校生と、それを心配そうに見つめる母親の姿を描いている。

戦後は、学生運動といえまず全学連(全日本学生自治会総連合)の運動であるが、それが極限に達したのが1960(昭和35)年の「日米安保条約」改定阻止闘争であった。この闘争をほぼリアルタイムで描いた第5(5)期の作品に、舟橋聖一(1904～1976)の『エネルギー』(1960年)がある。

それからほぼ10年を経た1968(昭和43)年から翌年にかけて、政治的スローガンと合わせ学園民主化などを掲げて全国の多くの大学で吹き荒れたのが、全共闘(全学共闘会議)の活動である。この時期の、ある大学紛争の過程の中の教員・学生たちの生態を描いてみせたのが、三浦朱門(1926～)の『竹馬の友』(1969年)である。彼は当時、日大の教授として実際に大学紛争の真っ只中にいた。ほかに、大学紛争を扱った作品、あるいはそれを社会背景にした作品として、伊藤整(1905～1969)の『同行者』(1969年)、倉橋由美子(1935～)の『夢の浮橋』(1970年)、柴田翔(1935～)の『われら戦友たち』(1973年)などがある。これらの作品をすべて第5(5)期の作品とみなすか、それとも、少なくとも倉橋や柴田の作品は第5(6)期に属するとみなすかは見解が分かれよう。筆者はさきに、第5期と第6期との分岐点を、学生による大規模な政治的運動・政治活動が一応終焉した1969(昭和44)年とみたが、倉橋や柴田の作品は、少なくとも作者の意識の中ではまだその興奮が冷めやらぬ時期に発表されたものと思われるので、特別に第5(5)期に分類してもよいように思われる。

大学紛争後の、まだ余燼はくすぶってはいるが多くの学生が政治的運動からすっかり身を引いた時期に、新たな生き方を模索しつつ醒めた眼で書かれた作品に、第6(6)期の三田誠広(1948～)の『僕って何』(1977年)がある。やや遅れるが、学生運動への挫折から出発した点では同じ系譜に属するとみなせる作品として、増田みず子(1948～)の『麦笛』(1981年)を挙げることができる。

ちなみに、大学に端を発した学園紛争は、1970(昭和45)年当時、一部の高校や中学校にまで飛び火していたが、政治活動を内申書に書かれたために志望高校に不合格になった少年とその保護者が起こした裁判を題材にしたのが、小説家というよりは評論家として知られる小中陽太郎(1934～)がまとめた『小説内申書裁判』(1980年)である。この裁判は結局、原告側の敗訴に終わったが、現代に至るまで教育界に大きな問題を突きつけている。選抜の基本は試験か内申書か、あるいは面接か。それらの資料をどう評価するか。既に事実上の義務教育となっている高校教育の入口で、そもそも選抜は必要か。なお、この作品は、大学紛争の影響を大きく引きずった中学生が主人公なので第5(6)期の作品とみなしても良いが、筆者の前述の定義に従って厳密に分類すれば第6(6)期の作品ということになる。

6. 大学生の恋愛事情

青春に恋愛はつきものである。というより、むしろ恋愛は青春の本質そのものであろう。大学生の恋愛を扱った作品は枚挙に暇がない。前述の第2(2)期の『三四郎』もこれに該当するが、これは、片思いあるいはプラトニックラブの類である。同じ第2(2)期の小杉天外(1865～1952)の『魔風恋風』

(1903年)も、帝大生を主人公としている。ヒロインのほうは袴姿で自転車に乗って通学するハイカラな女子大学生（正確には女子大学という名の女子専門学校生徒）であり、そういう意味での斬新さはあるが、ストーリー自体は当時ありきたりの恋愛風俗小説である。

これに対し、同じく大学生（帝大生）と女学生を主人公にして同じ時期に書かれた小栗風葉（1875～1926）の『青春』（1905年）は、当時としては極めてセンセーショナルな作品であった。結婚願望のまるでない自立志向・独身主義の女子大生が、生活力なく観念の世界に生きる帝大生と交際して妊娠し、困り果てた男は女に墮胎薬を飲ませ、その結果、彼は墮胎罪に問われて逮捕され服役し、云々という筋立てである。不本意な妊娠と墮胎（中絶）といえば、そのモチーフは第二次大戦戦後になると多くの文学に現れるが、とくに有名なのが第5(5)期の石川達三（1905～1985）の『青春の蹉跎』（1968年）である。また、既成倫理に反逆する無軌道な大学生が青春を謳歌する石原慎太郎（1932～）の『太陽の季節』（1955年）も今なおあまりにも有名である。

逆に、性関係を避けて純愛を貫こうとした婚約中の男女（男は大学生）が危機に陥り、結局はそれ乗り越えてゴールインに至る、というのが三島由紀夫（1925～1970）の『永すぎた春』（1956年）である。三島の作品にしては深刻さの少ない、軽妙な小説といえよう。さらに、純愛の手前、片思いの段階で足踏みする大学ボート部の学生を描き、やるせなさの極致を感じさせる作品といえば、田中英光（1913～1949）の『オリポスの果実』（1940年）である。これは国全体が戦争に彩られていた第4(4)期の作品であり、男も女もストイックであらざるを得なかった当時の雰囲気如実に反映しているとみなせよう。ちなみに、主人公は大学生であるとともに国威発揚を宿命づけられたオリンピック参加選手でもあった。

こうして昔も今も大学生には硬軟取り混ぜていろいろいる。ちなみに「青春の蹉跎」「太陽族」「永すぎた春」はいずれも当時の流行語となった。

7. 大学教員の生態

むろん、大学生だけでなく、教える側の、大学教授と称される人々もいろいろである。前述の第2(2)期『三四郎』、第3(4)期『人生劇場』『青春編』、第4(5)期『雲の墓標』から片鱗が伺えるように、総じて戦前の大学教授は権威も威厳もあり矍鑠としていたといえようが、戦後はすっかり様相が変わる。前述の第6(6)期『太郎物語（大学編）』に登場する太郎の父親は大学教授であるが、息子には友達のように接する軟弱なパパであり、威厳はほとんど感じられない。もっとも、軟弱ならまだしも、総じて戦後の小説に登場する大学教授には、そもそも品行方正な人物があまりいないようである。

第5(5)期の石川達三『青色革命』（1952年）は、イデオロギー対立の中で左右に揺れ動く無節操な教授を描いている。前述の『太郎物語』の作者曾野綾子の夫が前述の三浦朱門であるが、彼は長い間、日大教授と作家との二足の草鞋を履いていた。彼の『セルロイドの塔』（1959年）は「象牙の塔」をもじって大学人を揶揄した作品である。塔といえば、同期に属する阿部知二（1903～1973）の作品に『白い塔』（1963年）がある。ここには、文部省教科書検定のいわゆる右傾化に翻弄される教科書執筆者の大学教授や出版業者の生態が描かれている。さらに、同期の類似タイトルの長編『白い巨塔』（1964年以降）は、権勢欲・名誉欲をむき出しにした国立大学医学部教授を主人公とする山崎豊子（1924～）の長編であり、数度にわたって映画化・ドラマ化された。

同じ第5(5)期の松本清張（1909～1992）の『カルネアデスの舟板』（1956年）も教科書検定問題を扱っている。教科書執筆者の大学教授が、検定が厳しさを増すにつれて自分の思想的立場を微妙に修正し、変節したあげくにライバルを蹴落としていく話である。同期同作者の『落差』（1956年）は、教科書監

修者を務める大学教授の人格の二面性とその落差を描く。さらに同期同作者の『地の骨』(1967年)は、入試問題草稿の紛失という失態からストーリー展開が始まり派閥争いや漁色に明け暮れる大学教授の生態を描いている。

ちなみに、教科書の検定や採択をめぐる文部省・教科書執筆者・出版業者にまつわる醜聞は、既に明治30年代から存在した。その経緯を垣間見せてくれるのが第2(2)期に属する内田魯庵(1868～1929)の『社会百面相』(1902年)である。ちなみに当時の文部省は、こうした不祥事への対策を口実にして、教科書を検定から国定へシフトさせたのであった。

新しいところでは、第6(6)期の筒井康隆(1934～)の『文学部唯野教授』(1987年)が、嫉妬と噂話と派閥争いに明け暮れる大学教授たちの生態をパロディーとして描いて秀逸である。読者は笑いながら、「教養」のあり方、学問の意義などを考えさせられることになる。

8. 受験と予備校・塾・家庭教師

上級学校に入るためには昔も今も入学試験を突破しなければならないが、その対策のために予備校・塾・家庭教師がある。珍しいのは予備校の教師を主人公にした小説である。第6(6)期に属する城山三郎(1927～)の『今日は再び来らず』(1977年)がそれで、このタイトルは主人公が勤める予備校のキャッチコピーという設定になっている。多くの読者が代々木ゼミナールの「日々是決戦」を連想するであろう。実際、この小説の舞台のモデルとなっているのは代々木ゼミナール・駿台予備学校・河合塾という日本の大手三大予備校で、作品中ではそれぞれ湯島セミナー・田町予備校・田代塾として登場する。それらの予備校の気質の違いと互いのシェア拡大合戦が作品の背景に見え隠れする。

高校生というと、とかく大学受験競争が話題にされやすいが、それを主題とする小説は案外少ないようである。松田優作主演で映画にもなった第6(6)期の本間洋平(1948～)の『家族ゲーム』(1981年)がその代表であろうか。優等高校生の兄と劣等高校生の弟に家庭教師が絡んだ小説であるが、決して暗さはない。受験をテーマとした作品といえば、むしろ戦前の、旧制高校受験を扱った第2(3)期の久米正雄(1891～1952)の『受験生の手記』(1916年)が有名であろう。主人公は受験に2度失敗し、弟に先を越され、恋人まで弟に盗られ、絶望して自殺してしまう。こちらは何とも暗くやるせないストーリーである。

1980(昭和55)年前後はマスコミに「乱塾時代」と揶揄された時期にあたるが、三浦朱門の『若葉学習塾』(1981年)は、文字通り学習塾を舞台にストーリーが展開する。ここは進学塾というよりは町の補習塾であり、わかるまで根気よく教える教師の姿勢など、とかく公教育では見失われがちな、教育の本来的なあり方が問われている。

9. 大人への過渡期の生徒たちとその教師たち

前節までは主として大学生や大学教員の生態を中心にみてきたが、旧制中学や新制高校といった大人への過渡期にあたる生徒たちやそれを導く教師たちに焦点を当てた作品もたくさんある。今度はそれらに眼を向けよう。

まず高校教師に焦点を当てた作品から。第6(6)期の三浦朱門『校長』(1981年)は、修学旅行中に起こった女生徒暴行妊娠事件に端を発する公立商業高校の紛争、それを解決するために教育委員会から派遣された校長代理の奮闘ぶりを描いている。生徒が教師に向けるパワーの大きさからみて状況設定は70年代前半であろう。同じ作者による『教師』(1983年)の主人公は、公立高校長の地位を捨てて教え子の母親と駆け落ちしながらも、自立し一人で学習塾を開いて新たな生きがいを見出す男である。

さらに同じ作者の『定年』（1984年）には、定年を間近に控えた公立高校長の回想と感慨が硬軟さまざなエピソードを取り混ぜて描かれている。

次は高校生に焦点を当てた作品である。深刻なトーンの作品として知られるのが、酒乱の母をもち欠席がちのため教師に偏見の眼を向けられる高校生と彼に惹かれる同級の女生徒との交流を描いた、第6(6)期に属する高樹のぶ子（1946～）の『光抱く友よ』（1983年）である。逆に、いわば底抜けに明るい作品、高校青春スポーツ小説として有名なのが、同期に書かれた高橋三千綱（1948～）の『五月の傾斜』（1977年）、『九月の空』（1978年）、『二月の行方』（同）である。これらは、剣道を生き甲斐とする高校生の友情やほのかな恋愛を描いた連作である。同じく明るく潑刺とした高校生を描いた爽やかな作品として、前述の曾野綾子『太郎物語（大学編）』に先立つ『太郎物語（高校編）』を忘れるわけにはいかない。

スポーツといえば、杉森久英（1912～1997）の『黄色のバット』（1959年）は、甲子園出場をかけて県予選を勝ち抜き、ついに優勝した某高校野球部が、私設応援団の不幸事から甲子園出場を危ぶまれる事態に陥る話である。なにやら近年よく起こる事件を髣髴とさせるストーリーである。問題解決に連帯責任が重んじられるのは当時も今も変わらない。早くも第5(5)期にこのような作品が現れていたことに驚きを感じる向きもあろう。

戦前の教師や生徒はどうか。戦前の旧制中学の生徒は年齢的には今の高校生にほぼ相当する。第2(2)期に属する夏目漱石の『坊っちゃん』（1906年）は学校小説の古典中の古典であり、狸、赤シャツ、野太鼓、うらなりなど、俗物根性の中学教師を戯画化し揶揄した痛快小説の典型である。第2(3)期に属する芥川龍之介（1892～1927）の『毛利先生』（1917年）に登場する毛利先生は、受験に役立たない無駄話をして生徒から軽蔑される頼りない中学英語教員である。しかし、その熱意・情熱は半端ではない。彼の愚直ぶりはある意味で教育者の鑑である。ちなみにこの作品では、文法にこだわり過ぎる日本の英語教育の弊害が早くもモチーフにされている。

同じく教師が戯画化されていることで有名なのは、終戦直後の第5(5)期に発表された石坂洋次郎（1900～1986）の『青い山脈』（1947年）とその続編にあたる『山のかなたに』（1949年）である。青森県の旧制中学の男生徒と近隣の女学校の生徒が主人公で、始まったばかりの戦後民主教育のもとでの爽やかな恋愛と友情とが描かれている。前者は何度か映画化された。石坂の作品では、戦前の暗い軍国主義教育の時代、すなわち第4(4)期に書かれた『若い人』（1933年）も定評がある。これは、キリスト教主義の女学校を舞台に、教師と女学生の恋に非合法の社会主義活動にのめりこむ女教師が絡む物語である。

最後に特筆したいのが、第5(5)期の最後を飾る記念碑的作品ともいうべき庄司薫（1937～）の『赤頭巾ちゃん気をつけて』（1969年）である。日本一の名門高校と当時はずれの高かった都立日比谷高校の生徒が主人公であり、もはや自分たちがエリートではなくなりつつある時代の近いことを予感し不安に思う心情が饒舌な独白形式で描かれている。

10. 生きにくい子どもたち 義務教育内外の諸問題

児童・生徒や教師の生きざまよりもむしろ、非行、いじめ、自殺、未就学、学級崩壊、不登校、性衝動など、義務教育の現場とその周辺で起こるさまざまな事件そのものに焦点を当てた作品群として、以下のものがある。

第3(3)期に属する山田清三郎（1896～1987）の『小さい田舎者』（1927年）は、小学校を首席で卒業しながらも貧困のため中学に進学できなかった主人公が、やがてスリ仲間と堕ちていくという切ない

筋立てである。逆に、第3(4)期の山本有三(1887~1974)の長編『路傍の石』(1937年以降)は、中学に進学できない貧しい少年が苦労を重ねながらたくましく成長していくさまを描いた一種の教養小説である。同じく第3(4)期に分類される木山捷平(1904~1968)の『うけとり』(のち『初恋』と改題、1933年)は、実際にはしていない塀への落書きのぬれぎぬを教師から着せられ、誤解を解こうと躍起になればなるほど袋小路に陥る小学生の哀感をうたう。

戦後まもない第5(5)期に田宮虎彦(1911~1988)が発表した『異端の子』(1952年)は、いじめを扱った小説の白眉である。ソ連によるシベリア抑留から帰還した父親をもつ小学生の姉弟が、「アカの子」として、学校の児童ばかりでなく周囲の大人たちからもいじめ抜かれ、いじめた側は誰一人として痛痒を感じないという筋立てである。一般にいじめは、表面的には個人あるいは狭い集団によるいじめであるが、この作品は、根深い差別と偏見に起因する地域社会全体からのいじめも厳然として存在するというところに、改めて思いを至らせる秀作である。

第6(6)期の作品に眼を向けよう。乱塾時代といわれ始めた1970年代後半、母子が一体化して臨む弱肉強食の私立中学受験戦争をパロディー化した城山三郎の『素直な戦士たち』(1978年)が評判となった。その数年前には、長年の小学校教員体験に基づいて灰谷健次郎(1934~2006)が発表した『兎の眼』(1974年)が多く読者の感動を喚起していた。こちらに登場する子どもたちには、小動物や障害を負った弱者などに対する優しいまなざしがある。また、平成に入ってから作品ではあるが、同じ作者の『砂場の少年』(1990年)も、いじめ、学級崩壊、非行、登校拒否、体罰、画一的授業など中学生の教育環境を幅広く扱った秀作である。藤原審爾(1921~1984)の『死にたがる子』(1978年)は、当時よく報道されていた中学生の自殺の問題を扱い、理由がわからず困惑する周囲の大人たちの姿を描いている。

11. 義務教育の中の苦悩する教師たち

児童・生徒だけでなく義務教育学校の教員、とりわけ小学校教員のほうも、小説の中でいろいろに屈折し悩んできた。それを挙げていこう。

古いところでは第2(2)期に属する田山花袋(1872~1930)の『田舎教師』(1909年)が有名である。日露戦争当時の田舎の代用教員が、心満たされぬまま結核をわずらい若くして死んでいくという筋立てである。この花袋と並んで自然主義文学の双璧をなすのが島崎藤村(1872~1943)であるが、被差別部落出身の小学校教師を主人公とする彼の『破戒』(1906年)は、今なお残る部落差別の理不尽さを鋭くえぐった作品として評価が高い。

やはり第2(2)期に属する国木田独歩(1781~1908)の『酒中日記』(1903年)は、運命に翻弄される小学校教師が主人公である。ちなみに同じ独歩の『富岡先生』(1903年)のほうは、どこか鬱屈した私塾の教師を主人公としている。第2(3)期に属する久米正雄(1891~1952)の短編『父の死』(1916年)は、失火のために校舎と御真影を消失した責任を取って割腹自殺を遂げた小学校長の話であるが、これは彼自身の父親がモデルである。

第3(3)期に属する山本有三の『波』(1928年)も、主人公は小学校教師である。彼は妻の産んだ子が自分の子かどうかわからずに悩みつづけるが、やがて、子どもはすべて「学校の子供」「社会の子供」「人類、宇宙の子供」であるとの悟りに達する。谷崎潤一郎(1886~1965)の『小さな王国』(1916年)の主人公は、担任しているクラスの集団力学に翻弄される貧しい小学校教師である。学級経営の難しさを象徴的に描いた作品である。久保田万太郎の戯曲『大寺学校』(1927年)は、公立小学校に圧迫され廃校を余儀なくされつつある私立小学校(代用小学校)の校長が主人公である。

詩人・歌人として著名な石川啄木（1886～1912）には小学校の代用教員の経験があり、その経験をもとに第2(2)期に短編小説『雲は天才である』（1906年）や『足跡』（1909年）が書かれた。両作品とも、主人公のヒロイズムが鼻を突くとよく批判されるなど、小説としての評価は低い。後者の作品を読むと、義務教育制度が確立されたとはいえ明治末の日本には未就学児童がまだ大勢いたことがうかがわれるが、昭和も半世紀を過ぎてから未就学児童の問題をいまさらのように思い起こさせたのが、第6(6)期の三好京三（1931～）の『子育てごっこ』（1975年）である。これは、ある放浪作家に連れ回され未就学児童となっていた彼の孫娘を引き取り、実子のように育てた小学校教員夫妻の物語であるが、下敷きにあるのは作者夫妻の実体験である。

第4・5(5)期に分類される壺井栄（1899～1967）の『二十四の瞳』（1952年）は、戦中から戦後にかけての香川県小豆島の小学校分教場を舞台にした、児童と教員の心温まる交流の物語であり、作品を通して戦争の悲惨さ、平和の尊さを訴えている。何度も映画化・テレビドラマ化された。終戦直後に無頼派作家のひとりとして一世を風靡した人物に坂口安吾（1906～1955）がいるが、第4(5)期に属する『風と光と二十の私と』（1947年）は、大正末期における彼の小学校代用教員の体験が下敷きになっている。

第5(5)期の石川達三『人間の壁』（1957年）は、定数削減で解雇された小学校教員と日教組（日本教職員組合）による不当解雇撤回を求める裁判闘争が主題であり、日教組活動が華やかだった頃を彷彿とさせる長編で、これは佐賀県で起きた実話をほぼ忠実にたどっている。

12. いわゆる特殊教育

知的障害児が登場する作品としては、第2(2)期に属する国木田独歩の『春の鳥』（1904年）があまりにも有名である。障害児を「殆ど禽獣に類している」などと表現する独歩の障害者観自体は、現代では強く否定されるべきものであるが、この作品は今なお、障害者教育・障害児福祉のあり方について深く考えるための手掛かりを与えている。第4(4)期では、障害児というほどではない軽度の発達遅滞児たちのいわゆる特殊学級を舞台にした本庄睦男（1905～1939）の短編『白い壁』（1934年）が、評価の高い作品である。作者自身にも教員体験がある。

同じ第4(4)期の壺井栄の三部作『大根の葉』『風車』『赤いステッキ』（1933年以降）は、母親や兄の愛情に支えられながら眼の不自由な少女が周囲のいじめにめげずに逞しく育っていくさまを描く。小川未明（1882～1961）といえば児童文学作家として著名であるが、大人向けの作品も少なくない。第3(3)期の『河の上の太陽』（1917年）は、目が不自由になった小学生が学校の内外でいじめられる話であり、主人公の入水自殺が暗示されて作品は終わる。いわば、大人向きに書かれた童話である。

13. 作家の自伝小説・自伝的小説

多くの作家が自伝小説を書いている。また、厳密な意味での自伝ではないが自伝「的」作品とみなせるものも少なくない。それらの中から学校時代に焦点が当てられているものを厳選し、ほぼ時代順にたどってみよう。学校時代といっても小学校から大学までさまざまであり、無論、複数の学校にまたがる作品も少なくない。描かれている時期と執筆時期との時間差（タイムラグ）もさまざまである。しかも、かなりの程度まで事実に基づいているものから、ほとんどフィクションに近いものまで多彩である。ここでは自伝か自伝「的」かはあまりこだわらないことにしよう。

古いところでは、第1・2(2)期の徳富蘆花（1868～1927）の『思出の記』（1900～01年）が有名である。これは、熊本の旧家に生まれ明治という新しい時代の息吹に触れながら成長していった主人公の、

小学校から大学にまで及ぶ回想であり、恋愛小説として読むことのできる部分もある。とはいえ、伝記小説の傑作といえ、何と云っても、第2(3)期に属する有島武郎(1878～1923)の『星座』(1922年)であろう。ここでは、明治30年代初頭の札幌農学校の生徒の生きざまが、学問・恋愛・性衝動・友情・貧困などの観点から克明に描かれ、主人公の革命思想やキリスト教への憧憬・傾斜もうかがえる。やはり第2(3)期に属する菊池寛(1888～1948)の文壇出世作に『無名作家の日記』(1918年)があり、京都での学生生活が描かれているが、これは基本的にはフィクションである。

井上靖(1907～1991)の連作『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』(1960年以降)には、伊豆湯ヶ島の母親の実家で育てられ文学への眼を開かれていった小学校・中学校時代が描かれている。第3(5)期に位置づけられる作品である。小樽高商時代の思い出に取材した、やはり第3(5)期に属する伊藤整の『若い詩人の肖像』(1955年)も著名である。第3(6)期に属し、これとよく似たタイトルなのが、堀田善衛(1918～1998)の『若き日の詩人たちの肖像』(1966年以降)である。こちらは慶応義塾大学仏文科時代の交遊が中心に綴られている。第3(4)期の谷崎潤一郎の『異端者の悲しみ』(1917年)は、彼の東京帝大時代の体験に基づく作品である。主人公は生きる意味を見出せず、自堕落な生活の中で将来に対する不安と焦燥につつまれる日々を送る。

下村湖人(1884～1955)の長編小説『次郎物語』(1936年以降)は第一部から第五部まであり、1936(昭和11)年に書き始められ、それから18年間、死の前年まで書き継がれた。叙述は明治30年代の次郎の幼児期・児童期から旧制中学の時期を経て昭和初期にまで及んでいる。通読するとアナクロニズムも感じざるを得ない部分も随所にあるが、一応、第2・3(4・5)期に属するとみなされよう。

第3・4(6)期に分類できる藤枝静男(1907～1993)の長編『怠惰な男』(1971年)は、昭和初期に大学医学部に入学した作者の、非合法左翼運動とのかかわり、検挙・拘留とその後の顛末が下敷きになっている。左翼といえば、プロレタリア文学の系譜を一貫して継承してきた松田解子(1905～2004)の、第3(4)期に属する『師の影』(1941年)は、彼女自身の女子師範学校在学中の寄宿舎での体験を下敷きにしていると考えられる。男性教師への思慕、同級生や先輩との葛藤など、「憎む反面では愛されたいところ」が生き生きと描かれている。

詩人の中野重治(1902～1979)には、旧制中学入学までを回顧した第3(5)期の『梨の花』(1957年)、旧制高校時代を回顧した第3(4)期の『歌のわかれ』(1939年)、大学時代を回顧した第3(5)期の『むらぎも』(1954年)の三部作がある。第3(5)期の杉浦明平(1913～2001)の『三とせの春は過ぎやすし』(1973年)や第4(5)期中野孝次(1925～2004)の『麦熟るる日に』(1977年)も、旧制高校時代の体験に由来している。

第4(5)期に属する安岡章太郎(1920～)の『悪い仲間』(1953年)の中では、太平洋戦争前夜の時代の大学生たちが、退屈に任せて食い逃げ・盗み・のぞき見などをする。こうした逸脱行動は先行き不透明な時代に生まれ合わせた青年たちの不安の病理の証しであろう。北杜夫(1927～)の『死』(1964年)は、父親の斎藤茂吉の死に臨んで若き日の自分と父親との軋轢を回顧した作品であり、第4・5(5)期の作品と位置づけられよう。

第5(5)期に属する高橋和巳(1931～1971)の『憂鬱なる党派』(1965年)は、かなりフィクションが濃厚ではあるが、左翼革命政党の活動に明け暮れた1950年代初頭の京大生生活の回想というかたちをとっている。他方、同期の立原正秋(1926～1980)の『暗い春』(1967年)は、終戦直後の早稲田大学における左翼系のサークル活動に基づく作品である。第5(6)期に属する野坂昭如(1930～)の『行き暮れて雪』(1979年以降)は、終戦直後の浮浪児から身を起こし、旧制新潟高校を経て早稲田大学に入り、閉塞的な状況の中で将来を模索し始めるまでのプロセスを、回想的に描いている。

最後に、「学校小説」に含めるにはスケールが桁違いに大き過ぎるが、精神医学者としても著名な加賀乙彦（1929年）の大長編『永遠の都』（1988年以降の三部作『岐路』『小暗い森』『炎都』を整理統合）を挙げておこう。これは第4・5(6)期に属する大河小説であり、戦争を挟んだ時期の、彼自身と彼の一族とをモデルにしたと思しき人物たちの変転極まりない生きざまが、二・二六事件や東京大空襲といった日本史上の重大事件と絡めて壮大なスケールで描かれている。この間、主要登場人物のひとり悠太は、最初の幼稚園児から陸軍幼年学校を経て多感な都立高校生にまで成長していく。

14. その他の異色作品

前節までの分類では収まりきれなかった異色の作品群をここで挙げてみよう。

プロレタリア文学の作家として名高い徳永直（1899～1958）の第4(4)期の短編『八年制』（1937年）は、執筆前年に帝国議会で審議され（結局は廃案になった）義務教育年限延長問題を、貧窮層の視点から描いている。年限が6年から8年に延長されることは「増税より大変だよ」という嘆きのうちに、貧窮にあえぐ労働者階級の親たちの悲愴感が集約されている。貧困といえば、やはり第4(4)期に属する金史良（1914～1950）の『光の中に』（1940年）は、差別され貧窮の中に身をおかざるを得ない在日朝鮮人どうしの心の交流を、主人公である大学生のセツルメント活動のなかに描く。

戦後の世相を反映した第5(5)期の作品に眼を向けよう。小島信夫（1915～2006）の『アメリカンスクール』（1954年）は、中学校の英語教師が向学のために大挙してアメリカンスクールを見学を訪れる話である。彼らの中には必要以上にアメリカ人に媚びる者や英会話が全くできずオロオロ・オドオドする者もいて、終戦間もない時期の雰囲気をよく伝えている。日本人の英語コンプレックス、アメリカ人コンプレックスを照射している作品でもある。また、同期の阿部知二『人工庭園』（1954年）は、伝統を誇る女子大学に充満する息苦しい封建制の犠牲となって自殺する学生を描いた社会派小説である。彼女の恋人・先輩・同級生・教員などの人間関係が複雑に交錯し、真相はついに藪の中のままで終わる。

第5(5)期の終わりに位置し、第6期、ひいては平成の時代をも先取りしていると評することができるのが、北杜夫の『こども』（1968年）である。非配偶者間人工授精によって息子をもうけた父親が、やがて成長したその子の非行に悩まされるようになり、実の父親（つまり精子提供者）を突き止めようと執念を燃やすが、壁に突き当たるといふ、なんとも現代風の筋立てで、とても1960年代の作品とは思われない。医学部を卒業した作家ならではの先見の明といえようか。

同じく医療に関連する作品の中で、第6(6)期に属するものを挙げておこう。宮原昭夫（1932～）の『誰かが触った』（1972年）は、ハンセン病療養所内に設けられた分教場で学ぶ隔離された小中学生たちと教員たちとの葛藤や交流を描いている。既に特效薬もでき、ハンセン病は恐くない病気であると頭ではわかっている、子どもたちと接しているとつい身構えてしまう新任女性教諭の心理のうちに、まだ「らい予防法」によって患者の人権が抑圧されていた時代の、世間一般の人々のこの病気に対する差別・偏見が見え隠れしている。

最後に、国語教育、とりわけ作文教育に関連した作品を挙げておこう。まず、第3・4(4)期に属する太宰治（1909～1948）の『千代女』（1941年）。かつて作文の天才少女ともて囃されたが今ではすっかり自信をなくしている女学生を主人公に、作文教育の本来のあり方を軽妙洒落な文体で問うた作品である。これは作者太宰自身の文学論にもなっている。ここには、大正期の鈴木三重吉らによる「赤い鳥」文学運動や、そこから刺激を受けつつ昭和初期に新しい作文教育運動として東北から始まった生活綴方運動への言及も、やや皮相的に、しかも架空の名称に置き換えてではあるが、盛り込まれて

いる。

生活綴方運動は危険思想としてしばしば官憲の取締りの対象となったが、そんな逆境の中で運動の推進に賭けた東北の小学校教師たちの情熱的な生き方を掘り起こした作品に、高井有一『真実の学校』（1980年）がある。第3・4・5期とたどり執筆は第6期という、スケールの大きい作品である。ちなみに、昭和ではなく平成になってからの作品であるが、三浦綾子（1922～1999）の最後の小説『銃口』（1990年）は、北海道において生活綴方運動を推進した教師たちが戦時中に治安維持法違反のかどで弾圧された「綴方連盟事件」（1940年以降）を、綿密な取材に基づいて小説化したものである。

おわりに テキストブック『教育人間学のトリニティー』の構想

以上、100余にわたって日本近現代の「学校小説」を取り上げ、整理してきた。「教養」課程にある学生、とりわけ将来展望に悩んでいる学生にはぜひ読んでほしい作品ばかりである。とはいえ、学生に「ライフレビュー」あるいは「自分探し」のために読んでもらうためには、ただカタログを提示するだけでなく、この100余の作品の中からさらに厳選し、重要場面のアンソロジーとして提供することも必要であろう。

じつは、筆者は既に、そのようなアンソロジーからなるテキストブックを鋭意作成中である。とはいえ、単に小説の一部を抜粋して並べただけのテキストでは存在意義は薄いであろう。文学を通しての「ライフレビュー」や「自分探し」も「教養」の一環であるとするなら、そうしたテキストには、「文学」と並ぶ人文系「教養」の柱であってしかるべき「哲学」や「歴史（史学）」も盛り込み、「文学」「哲学」「歴史（史学）」をテキスト上で三位一体のかたちで有機的に統合すべきであると考えます。

むろん、ここでいう「哲学」は、たとえば先人の業績をなぞるだけの陳腐な哲学史であってはならないし、また「歴史（史学）」も、自分には関係のない過去の遺物をこね回すだけでは意味がない。学校文学の具体的なストーリーを核にして、それに肉付けしていくようなものでなければならない。「哲学」はまず何よりも、読者が自分の体験に引きつけて「いじめ」「非行」「虐待」などの問題を「いのち」の大切さと関連付けて思索することのできる、生命倫理あるいは臨床哲学でなければならないし、「歴史（史学）」は、自分の生育歴あるいは能動的な学習歴や受動的な被教育歴をたどる自分史に応用可能な近現代の学校教育史・教育制度史でなければならない。

以上のような視点から筆者は目下、学校教育を素材に、「文学」を中核としてそれを「哲学」や「歴史（史学）」と有機的に統合したテキストづくりを行っている。題して『教育人間学のトリニティー』。これは筆者が既に公刊した『医療人間学のトリニティー』（太陽出版2005年）の姉妹編にあたり、2007年末の刊行をめざしている。そこに収録する予定の「はしがき」の原案をここに掲げ、本稿を閉じたい。

*

*

*

本書のタイトルに掲げた「教育人間学」は、英語のエデュケーション・ヒューマニティーズの訳語である。エデュケーション（つまり教育上の）諸問題を、ヒューマニティーズ（つまり人文学あるいは人間学）の手法によって探究する学問といってよい。

次に「トリニティー」であるが、これは3つで一組になっているものをさす英語である。トリニティーというと、キリスト教の「三位一体論」、すなわち（父なる）神と（子なる）キリストと聖霊とは一体であるという理論が有名である。しかし、本書でいう三位一体のものは、哲学と歴史（史学）と文学で、いうまでもなくこれら三分野は、ヒューマニティーズの最も重要な3本柱である。本書で筆者

は、これら3つの分野を有機的に統合して、筆者なりの「教育人間学」を構築しようと努めた。

むろん、ひとくちに教育といっても、学校教育・社会教育・家庭教育などさまざまな側面がある。本書の「教育人間学」は、社会教育や家庭教育などをも視野に収めつつ、学校教育をおもな対象としている。欧米とは異なり、日本では、子どもの発達過程において学校という場が極めて大きなウェイトを占めてきた。日本の若者は良かれ悪しかれ学校という制度・システムに縛られてきた。日本では学校教育を無視して「教育」そのものを語ることはできない。ところが、ひとくちに学校といっても、小学校・中学校をはじめ、高等学校・大学、さらには専門学校や予備校などいろいろな形態があるし、広い意味では幼稚園なども学校に含まれよう。本書の「教育人間学」は、これらさまざまな学校教育の現場を視野に入れて、かなり幅広く教育問題を扱っている。

本書は、さまざまな現場で教育に従事している方々、教育学やその周辺の学問領域を専攻している学生、教育とその周辺領域に幅広い関心をもたれている一般の方々にお読みいただきたいのはもちろんであるが、専攻分野を問わず、広く大学生諸君、とくに将来展望が見出せずに悩んでいる諸君に読んでいただきたいとも願っている。その理由は後段で説明したい。

筆者が考える「教育人間学」は、決して抽象的・観念的な学問ではなく、日本の教育の現状を踏まえた具体的・実践的な学問である。本書は30あまりの章から成っているが、全章を通じて筆者が射程に収めているトリニティー（哲学・歴史（史学）・文学）を、ここで、より具体的に述べておこう。

本書でいう哲学とは、「いのち」にかかわる倫理を具体的・実践的に探究する臨床哲学、すなわち生命倫理（バイオエシックス）である。バイオエシックスは、1960年代のアメリカで、インフォームド・コンセントの確立などを求める医療消費者運動を大きな契機として成立し、自然環境保護・人種差別撤廃・女性解放・反戦平和などの運動と連動しながら学問的に確立されてきた。本書では、とくに「いのち」の尊さを見つめなおすために、教師と学生・生徒・児童との関係をはじめ、非行、いじめ、体罰、自殺など、日本の教育現場の「いのち」にかかわる諸問題に幅広く斬り込んでいる。

歴史（史学）の分野では、日本の近代以降の学校教育史・教育制度史に主眼が置かれている。それを、当時の社会的背景をも含めて叙述するよう努めた。欧米の先進諸国にならって近代的な教育制度が確立され始めた明治時代初期から現代までの教育、とくに学校教育のあゆみをたどり、そこから教訓を汲み取りつつ将来を展望することは、「教育人間学」の必要不可欠の課題といえるであろう。

文学については、同じく日本の近代以降の著名作家の作品の中から、主たる教育現場である学校を舞台とした小説、教師や児童・生徒・学生が登場する小説などの、いわゆる「学校小説」を厳選した。教育に携わる人々や教育を受ける人々の普遍的な感情の機微を具体的に捉えることができ、読者の琴線に触れる作品ばかりである。難解な語句には脚注をつけた。

とりわけ大学生諸君は、これらの小説のほんの一部に触れるだけで、読者である自分と同じような悩みを抱える登場人物が小説中にウヨウヨしていることに気づくであろう。そうした登場人物に感情移入することによって、自分ひとりの悩みだなどと思いついていたことが、じつは過去の多くの若者たちも通過してきた悩みであったのだと気づけば、自分は何も特別な人間ではなく「タダの人」なのだと思えることができ、かえって気が楽になるであろう。あるいは逆に、こんな素晴らしい生き方もあったのか、と小説を読んで一挙に視野が広がる場合もあるかもしれない。いずれにせよ、「学校小説」に触れることは、学生諸君にとって一種のショック療法になる。あとの思索を深め将来展望を見出すのは学生自身に課せられた仕事である。

以上のように本書は、小説の一部を素材にして教育、とくに学校教育の諸相を具体的に把握し（文学）、当該問題に関する社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える（歴史（史学））とともに、そこから現

代にも通じる哲学・倫理学的事項を汲み取って批判的に吟味し（哲学）、ひいては教育そのものの未来や個々の学生・生徒・児童の将来展望も実践的に切り拓くことを意図している。

過去の文学作品と現代に生きるわれわれとの間の距離を自覚しつつ、両者を行ったり来たりしながら思索を重ねることによって、われわれは過去から現在へと連なる教育の血脈を探り当てることができる。そうしてこそ、教育の明るい未来も展望できるであろうし、個々の若者が将来に対して抱えている悩みも解決のいとぐちを見出すことができるように思われる。章の枠を超えて有機的に関連し合っている事項も少なくない。それらに関しては巻末の年表や索引も十分に活用していただきたい。

（ふじおひとし 教養学・教養論）